

自立する文明にどう対処するか？

ポスト文明に向けて

染谷 臣道

目次

はじめに

一 文化とは何か？ 何のために？

1 文化の骨格は技術

2 技術が文化を開花させた

二 プレ文明とは何か？

1 プレ文明の構造と特性

2 プレ文明の社会には権力はなかった

三 文明をめぐって

1 文明とは何か？

2 通俗的文明観

3 「ヨーロッパ文明中心主義」を受け入れた日本人

4 ヨーロッパ文明の大罪

5 文化相対主義による文明中心主義批判

6 文化は変化するが「発展」はしない

7 発展史観の呪縛からの解放

8 文化は多様に変化する

四 文明の構造

1 立体構造をもつ文明

2 矛盾を解消する運動

3 文明のますます強まるダイナミズム

4 文明は「社会・政治・経済・文化」(狭)の複合

5 各領域間のチェックアンドバランス

6 自立的文明が二つの自然に働きかける

五 文明を自立させた人間の欲望

六 ポスト文明を構想する

はじめに

人体にたとえれば、文化は技術という骨格に支えられた肉体の営為ということになろうか。樹木にたとえれば、技術は根と幹、文字通り根幹となって樹木全体を支え、葉や花や実を含めた樹木全体の営為が文化ということになろうか。技術は文化の基礎であり中核である。技術は文化全体すなわち社会、政治、経済、(宗教、芸術、思想、学術、技術等を含む)文化(狭)を支え、開花させた。技術は変化し、古い技術の上に新しい技術が積み重なる累積性、また置き換えられるという置換性、あるいは他の技術と混ぜ合わされるといふ融合性などがあるから時を追うことに発展する。そうして発展した技術を基礎に文化も厚みを増してきた。そうした厚みはプレ文明から文明へと変貌した文化の歴史に明白である。プレ文明を灌木にたとえれば文明は大樹ということになろうか。文明を支える技術はたくましく莫大なエネルギーを必要とする。問題はそこにあつた。¹⁾

技術は変化発展性、累積性、置換性、融合性などの特性をもっているために、そしてまた、社会、政治、経済、文化(狭)といった文明のあらゆる領域と関わっているために、進歩のスピードは時間を追うごとに速まってきた。現代文明の急速な変化を見れば、そのことは一目瞭然である。莫大なエネルギーを使うのだから当然だろう。

技術は文化(狭)の一領域に過ぎない。しかし二つの自然に「働きかける」といふ本源的な作為性ないし能動性をもっているために、そして変化発展性、累積性、置換性、融合性をもっているために、ますます自立性を高めてきた。二つの自然とは、人間自身と環境を指す。人間、それは自ら作った文化によって環境から自らを括り出し環境と別れを告げた生き物であり、文化の内側にいるから「内なる自然」と表現する。それに対して環境は文化の外にあるから「外なる自然」と表現される。本来、人間も環境もともに自然なのであり、一体だったのだが、人間が文化を發明し、環境と向き合うようになったとき、環境から自立した。文化は自然を分断した。その文化は次第に厚みを増し、人間の環境からの独立性を高めた。現代文明はその究極であろう。

文明の時代を迎えるようになると、技術は社会、政治、経済、文化(狭)のあらゆる領域の基礎を固める役割を果たし、技術自身の自立性だけでなく、文化の自立性をも実現した。ますます自立の度を強めている文化すなわち文明にそれは顕著である。しかし時を追って、ついに文明はその生みの親である二つの自然に対して横暴な振る舞いを始めるようになった(図1参照)。文明は

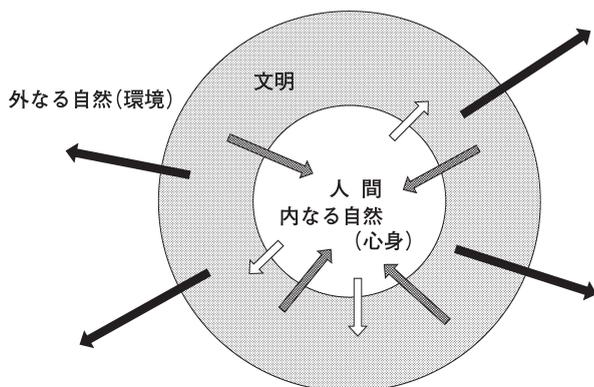


図1 〈外なる自然〉・文明・〈内なる自然〉の関係

貧困や戦争、さらに凶悪な犯罪や疾病などを引き起こし、人間を苦しめている。近年では、環境への働き掛けがますます強まり、深刻な環境問題を引き起こしている。これらは極度に発達した技術を基礎にして築き上げられた文明の所業である。文明を生んだ両親（〈外なる自然〉と〈内なる自然〉）はわが子の我侭放題や暴力に対してなすすべを知らないかのように見える。文明の我侭放

題と暴力は治まりそうにもない。

文明がこのような経過をたどるようになったのはなぜか。文明そのものの根元に関わるこの問題は、文明とは異なった文化すなわちプレ文明との比較で初めて明らかになるであろう。

技術というものは、そもそも人間が、環境にうまく適応するために、人間と環境の相互関係を調整する装置として生んだものだった。人間と環境の間はうまく調整されなければならない。互いに敵対するような関係は不自然というべきだろう。しかし現実には、ますますその不自然があたりかたもと自然であるかのように錯覚させる逆転が生じ、人間の感覚は混乱している。

技術はついに環境を破壊するようになった。他方、破壊されて悪化した環境は人間に報復する。こうして両者は敵対関係に入った。両者を破壊するような技術は本来の調整役としての役割を越えてしまったようだ。技術は過剰となってしまった。

技術の過剰は人間同士の間でも進んだ。社会の調整は至るところで失敗し、貧困、戦争、犯罪、疾病、自殺を引き起こし、ますます深刻の度を強めている。

二つの自然の間の関係、そして人間という〈内なる自然〉の間の関係（個人間ならびに人間集団間の関係）がともに健やかで良好な状態へと回復できるように努めなければならない。そのため

に文明はコントロールされなければならない。しかし現代文明の傍若無人ぶりに手を焼いている人類を見るにつけ、ほとんど絶望的な感さえる。それならば文明に「自浄能力」を期待するか。それができないとすれば、二つの自然が協力してこれに当たるしかない。それは人間の側の主導で行わなければならない。原理的にはできるはずである。どうしたらそれを実現できるだろうか。

本稿では、文化という言葉を広狭二つの意味で使う。そして広義の文化には文明とプレ文明そしてポスト文明を含む。狭義の文化は宗教、思想、芸術、学術、技術などの観念を含む。その観念には現実に関わる観念と理念の両方がある。ここでいう理念がしばしば「文明」の言葉で語られてきたものである。

以下ではまず広義の文化について述べ、プレ文明と文明について説明し、文明の構造とその問題点を明らかにする。そして文明の限界を越えるポスト文明を構想する。

一 文化とは何か？ 何のために？

文化（広義）とは何か。それは、文化人類学が伝統的に用いてきた意味での文化である。今から一四〇年前、イギリスの人類学者タイラーは次のように文化を定義した。「文化または文明とは

知識、信仰、芸術、法、道徳、慣習その他人間が社会の成員として獲得した可能性と習慣を含む複合的全体である」(Tyler, E. 1871: 2)。この定義は文化人類学という文化の定義の礎となり、今日でもしばしば言及されている。彼は、文化を社会の成員としての人間が獲得した知識や信仰などを合わせた全体と表現し、社会的に継承されるという後天性と人工物の全体であることを示した。タイラーは文化と文明を併記し、彼にとって、また、当時のイギリスでは両者の間には違いはなかったかのように見える。

このような文化概念は表現に違いがあるものの、基本的に今日でも継承されている。たとえばアメリカの人類学者クローバーとクラックホーンは彼らの著書 Culture で、数ある定義を検討したうえ、「文化とはシンボルによって獲得され伝承された外面的および内面的な、行為の、および行為のための、パターンから成り立つ。それはそれぞれの集団に特異な行動を生み、人工物にも表現される。文化の核は伝統的（つまり歴史に由来し、選択された）観念、とくに深くしみ込んだ価値（観）から成る。文化体系は、行為の結果と、行為を条件づける要因である」と定義した (Kroeber, A. L. & Kluckhohn, C.: 357)。

1 文化の骨格は技術

ところで、タイラーにせよ、クローバーやクラックホーンにせよ、彼らの定義には、人間が「環境に適応するために自ら作った手立て（技術）」であることが明記されていない。「言わずもがな」の大前提だから敢えて表記するまでもないということなのかもしれない。しかし文化はまずもって人間が「環境に適応するために、自らが作った手立て（技術）」であった。このことを強調して強調し過ぎることはないと考ええる。

技術がそのまま文化というわけではない。しかし文化の出発点はまず技術そのものがあり、技術が発達するに伴って徐々に文化へと成長したと考える。技術が文化の基礎であり、骨格と考える。

技術をもって生きるのは人間だけではない。どんな動物の生得的な行為にも技術が伴う。たとえばエゾリスは冬が訪れる前に土中にクルミなどの木の实を埋めておき、食料が不足する冬に備える。これも一つの技術だろう。ある種の鳥類ともなると後天的に獲得したとしか考えられない技術をもつ。たとえば、エジプトハゲワシはくちばしにくわえた石を上空から落ちて割ったダチョウの卵を食べる。卵に石を叩きつけて割るということも行う。そのときの石は道具であり、それを落とすとか、叩きつけるという行

為も技術とみなすことができる。また、キッツキフィンチは小枝を使って木の中に住む昆虫の幼虫を捕食する。そのときの小枝もまた道具であり、それを使って幼虫を捕食するのも技術だろう。鳥類はこのように石や小枝を使うが、チンパンジーともなると適当な硬さの枝を持ち歩いてシロアリの釣って食べる例も報告されている。シロアリを釣るという明確な目的のために適切な硬さの枝を意識的に選び、適切な長さで折り、しかも持ち歩く。これなどは人間が道具を使う例に極めて近い。技術の淵源はこのように人間を越えるが、しかし人間の技術は、言語などを含むより高度な文化の一環として獲得される。それは二足直立歩行によって歩行から解放され、ものをつかんだり、それを何らかの目的で使うことができるようになった前肢（手）の発生から始まると考えられる。

人類が二足直立歩行を始めたのは、およそ四〇〇万年前から三〇〇万年前の猿人アウストラロピテクス・アフアレンシスだといわれている。石器が初めて製作され、使われたのは二五〇万年前というから、直立二足歩行と石器の製作の間には明らかに関係がある。しかし初めての石器が二五〇万年前だとしても、それ以前に木器が作られ、使用されていたのではないかという推測は、チンパンジーのシロアリ釣りに使う「木器」を見れば可能である。

ただ、木器は石器と違って腐ってしまうから証拠として残らないために推測にとどまらざるを得ない。

道具の発達はその当初、気が遠くなるほど遅かった。最初の石器であるオルドワン石器は実に一〇〇万年もの間ほとんど形を変えることがなかったし、その後に見れたアシュレアン石器も一四〇万年もの間、ほとんど変わることがなかった。しかし今から六〇万年前そして二五万年前になると石器は大きな変化を見せたのであった。オルドワン石器が「場当たり的」に作られたのに対してアシュレアン石器あたりになると「完成品への見通し」が優れ、加工技術の高さで際だつたという(ルーウィン：二四〇、一五三)。こうした技術の高度化はその後進み、文化の膨らみも増した。

2 技術が文化を開花させた

技術の変化は、技術そのものが引き起こした文化全体の変化との間の相互作用の結果だから、当然ながら、変化のスピードは加速される。二五万年前の変化、そして五万年前の変化と、時を追うに従って技術を中心に文化全体が急速に変化してゆく。宗教がいつ生まれたのかはもちろん明らかではないが、五万年ほど前のネアンデルタール人は埋葬文化をもっていたらしい(クライン&

エドガー：二〇四―〇五、片山：七九)。この時期は、クラインがいう、ダチョウの卵から相当な時間と技術を使ってピーズを作った「文化の曙(意識のビッグバン²)」の時期に当たる(クライン&エドガー：二〇一―二〇)。この時期以前にも文化の膨らみがなかったとはいえないが、この時期にさらに進んだといえよう。

技術力が低い時代、住むところは、アフリカ中部や東南アジアのように比較的温暖で動植物が豊富な熱帯や亜熱帯に限定されていたはずで、北限は、精々、北京あたりまでだっただろう。極寒の地に住めるようになったのはかなり高い技術力をもってからであった。シベリアのバイカル湖の近くで発見されたマリタ遺跡は真冬にはマイナス三〇度にもなる極寒の地だが、二万三〇〇年前、その住居址は一年中使われていたという(木村二〇〇一：一五七)。マリタ遺跡からはマンモスゾウ、ケサイ、ウマ、トナカイ、バイソン、ホラアナライオン、オオカミ、ホッキョクギツネ、クズリなど多種の動物の骨が見つかっており、トナカイが圧倒的に多いとはいえず、(アフリカゾウとほぼ同じ大きさの)マンモスゾウも狩猟していた(木村二〇〇一：一五六、河村：一八一―一八二)。巨大なマンモスゾウを狩猟できるためには高度な性能をもった狩猟具が製作でき、狩猟ができる技術が発達していなければならなかった。(長さ三―五センチ幅一センチほどの細石刃を

骨や角でできた植刃器に埋め込んだ）槍、集団猟ができる社会組織、動物の習性を知る知恵などが必要だった。二万一〇〇〇年前のシベリアの狩猟民は巨体のバイソンを倒した。細石刃が突き刺さったバイソンの肩甲骨が見つかっている（木村二〇〇五：三八）。そうした狩猟によって安定的に脂肪分を摂取することが可能となり、暖房、衣服それに長期に滞在できる住居も造れるようになった。彼らは集団でマンモスゾウを湿地へと追い込み、ぬかるみにはまったマンモスゾウを捕えたようだ。溺死したマンモスゾウの遺骸が見つかっている。一万二〇〇〇年前頃とされるマンモスゾウの椎骨にも細石刃が突き刺さっていた。

発達した狩猟技術を持った人類に追われ、マンモスゾウは一万一五〇〇年頃にはカナダのエドモントンに達したという。やがてマンモスゾウは絶滅するが、その原因は、河村によれば、後期更新世末の温暖化に伴ってステップが後退しタイガとツンドラになってしまったことで衰退し始めたのに加え、人間による大量殺戮が「最後のとどめ」を刺したという（河村：一八六）。こうして技術の高度化によってホモ・サピエンスはほとんど全世界に拡散してきたわけだが、それでも文明の技術とは差があった。

時を追って石器の製作技術は高まり、やがて青銅器や鉄器などの金属器の製作へと引き継がれる。一万年ほど前に農業が始ま

り、食糧生産に余剰が生まれると農業以外の職種が生まれ、それに従事する人々も増えた。多種の工業が生まれ、工芸が生まれれば、技術の発達も幾何級数的に進展するの当然だろう。統治の必要のために算術も編み出され、それを基礎にした科学も発達し、技術の発達を促す。

このように技術の進展は技術分野内部の自己展開だけでなく、社会、政治、経済あるいは文化の領域との関わりで起こる。今日の急速な技術革新は、コンピュータの発達に見られるように、とくに経済システムとの関連で起こっていることは明らかである。

二 プレ文明とは何か？

文化をプレ文明、文明そしてポスト文明というように三分類すると判りやすいだろう。プレ文明とは文明以前の文化をいう。かつて「未開文化」と呼ばれていた文化である。現代の人類学では「未開」という言葉を避ける。それは、野蛮から未開そして文明へとという一九世紀の「文化進化論」が崩壊したからである。生物進化論の影響を受けて一九世紀の後半、文化にも進化があるという考え方が支配的になった。上述したタイラーも『未開文化』（二八七）で野蛮段階のアニミズム、未開段階の多神教そして

文明段階の一神教という宗教の進化を説いたし、モーガンも『古代社会』(二八七七)で生業や技術と婚姻形態ならびに親族や家族形態と関連させながら進化を説いた。こうした発展史観は、全ての社会が単一の直線的進化をたどるという考え方であり、欧米社会を進化の頂点とする欧米中心主義的考え方であるが、それは根拠がないものとして人類学では否定されている。ただ一般には今でも根強い影響力をもっており、その払拭が待たれる。

野蠻・未開・文明という「発展観」の根底に未発達(未熟)から発達(成熟)へという価値判断があるが、こうした考え方そのものも批判されなければならない。それについては後述する。

1 プレ文明の構造と特性

プレ文明の構造と特性はどのようなものだったのか? それについては、レッドフィールドがチャイルドに依拠しながら手際良くまとめている。彼はまず、①その社会集団が小さかったという点を挙げる。そこでは人々は互いに知り合い同士だった。そして②社会は孤立的で、自己充足的で自立的だった。③無文字社会だった。④同種の人々からなっていた。⑤強い集団結束の意識があった。⑥専従の専門家はいなかった。⑦人間関係は個人の地位に基づいて成り立ち、人は人格をもった人間として見られていた。

同時に自然もまた人間のように見られていた。⑧社会は親族関係から成っていた。⑨社会を統合していたものは精神的道徳的確信に基づいていた、という(レッドフィールド:二二二)。最後の「社会を統合していたものが精神的道徳的確信に基づいていた」という点はレッドフィールドが特に強調しようとしたことで、彼はとくに「精神相(moral order)」という言葉を使ってそれを表わしている。彼によれば、精神相とは「善なるものに関する默示的な確信を通し、または、明示的な理想像を通し、あるいは、善悪観の類似性を通して、人間をまとめていくものすべて」(レッドフィールド:二二七)である。この精神相は「技術相(technical order)」と対置すれば意味がはっきりする。技術相も(個人であれ、社会であれ)人間を秩序づける原理のようなものであるが、それは「相互の有用性、熟考した上での強制、あるいは同じ手段をもつばら利用することから生まれる」(レッドフィールド:二二八)という。彼は「技術相では、人間は物によって結びつけられ、また、人間自身が物なのである。人間は必要性や便宜性によって組織される。交通信号や警官に従って自動車は動くが、その規則と正しい動きを頭に浮かべてみればよい」(レッドフィールド:二二八)という。いうまでもなく、未開社会では精神相が強く作用し、技術相は弱い。他方、文明社会は技術相が大きな役割

を果たすようになるが、しかし精神相は「数多くの逆境を経て何らかの自律性 (autonomy) を獲得する」(レッドフィールド…三二)とし、彼はとくにこのことを強調する。自律性の獲得はもっぱら技術の向上によるが、技術の向上は単に精神相の自律だけでなく文化全体の厚みを増幅したのであり、文明を生み、拡大してきた主役として注目されなければならない。文化文明の「発展」の原動力はひとえに技術の発展そのものにある³⁾。

レッドフィールドがまとめたところを見れば判るように、プレ文明は同種の人々から成り立つ平等社会であった。男は狩猟、女は採集に明け暮れていた。大地を耕し、動物を飼育するという人工的な作業をまだ知らなかったから狩猟や採集という、動物と同じような営みで生活を送っていた。獲物や果実などがなかなか手に入らなければ小集団に分かれて移動を余儀なくされるようなこともあっただろう。親族関係が人々を結びつける重要な絆だったから親族関係に伴う上下の規律も強く働いていただろう。しかしその規律も世代を越えて継承されるから結果的には不平等は生じない。たとえば父親と息子の上に上下関係があったとしてもその息子はやがて父親になれば自分の息子に対して上位に就くことになるという具合に繰り返され、かつて息子として服従していた者も親となれば息子を従えることになる。後期旧石器時代には性的

二型が大きかった(身体の大きさに男女差があった)というが(ルーウィン…三三二)、だからといって社会的に男女差があったかどうかは疑問である。男の狩猟と女の採集のどちらも彼らの生活には必須だったはずで、男女差はなかったのではないかと思われる。

後の文明社会に比べれば比較的平等だったプレ文明の社会ではあったが、条件次第で格差社会も生まれたようだ。最近の考古学的発掘が明らかにしてきたところを見ると狩猟採集民社会でも社会的格差があったという。かつては、社会が複雑化したのは農耕牧畜が始まってからだと考えられていた。しかし新たに発見された考古学的知見から現在では農耕牧畜が始まる前にすでに社会は複雑化していたと考えられるようになってきている。後述するクワキウトル人、ハイダ人、トリングット人と同じように狩猟採集を営みながら定住していたことを示す例が報告されている。たとえば、モスクワの南西にある Mehirich 遺跡では一万五〇〇〇年前、五〇人ほどの人々が村を構成していた。家屋はマンモスゾウの骨を組み合わせて作られているからマンモスゾウなどで生計を立てていたのだろう(ルーウィン…三三九)。また、シリア北部の Abu Hureyra 遺跡では一万一五〇〇年前から一万一〇〇〇年前までの間、移動してくるペルシャ・ガゼルの狩猟と豊かな草原

植物を採集して五〇人から三〇〇人ほどの人々が村を作り、複雑な社会（格差社会）を構成して生活を営んでいた（ルーウィン…二二七―二二八）。いずれも農耕牧畜が始まる前だったが、すでに社会は複雑化し始めていた。

もちろん狩猟採集経済は自然に存在するものを獲得するだけの経済で、生産はしないから不安定だっただろう。Abu Hureyriaに住んでいた人たちは一万一〇〇〇年前に村を放棄したという。その理由は食糧源のとりすぎと気候条件の悪化だったらしいが、それは狩猟採集経済の不安定さを意味していた。

2 プレ文明の社会には権力はなかった

焼畑耕作という粗放的な農耕を行いある程度安定的に食料を獲得できたトゥピ・グアラニ人社会やトロブリアンド諸島人社会は、プレ文明とはいえ、階層化した社会になった。だが、文明社会とは根本的に異なる特徴をもっていた。それは、社会のリーダーたちに、威信は与えられても、権力は与えられなかった、という点にある。

リーダーが個人の資質でリーダーにされる「ビッグマン」の例として（一五世紀から一六世紀の）パラグアイのトゥピ・グアラニ人社会の例を挙げることができる。フランスの人類学者クラス

テルは「一人の男が首長にふさわしいと部族によって判定されるのはいかにして可能であろうか。弁舌の才能、狩人としてのノウハウ、軍事行動の統率能力なのだ。……首長は社会の係争を解消する任務（を負うが）、秩序と協調を取り戻すのに社会が認めている威信以外に手段をもたない。首長の言葉は法の力をもっていない」という（クラステル…二五七）。このような首長が自らの威信を保持しようとした場合、どのようなことが起こるだろうか。

クラステルによれば、それは戦争を引き起こすことによって可能となるという。「戦争で得られた威信は……戦争が繰り返されぬ限り急速に消えてゆく……。忘れられがちな自らの威信と栄光の記憶を人々に取り戻させるためには、……改めて戦争の機会を作り出す他はない。……しかし首長の戦争への欲望が、社会の平和への希望を圧倒しようとしはじめる時……首長は孤独を強いられ、死に至る、展望なき戦いを強いられる」（クラステル…二六一）。このようにリーダーの権力の発生は抑止される。

首長の権力が強大になる萌芽期に起こった例としてクラステルはまた次のような事例を紹介している。預言者による「首長の権力を破壊する……蜂起」である。それは一五世紀の終わり頃にトゥピ・グアラニ人社会の預言者が「地上の楽園を求めるために一切を捨てるよう」人々に呼びかけた事例である。預言者は「首長

の政治権力の重圧がますます強くなるのしかかって来つつあった」とき、「不幸の源泉は「一（いつ）」にあるとした。「一（いつ）」とは政治権力によって括られた社会を意味する。預言者はそれに反抗し、「地上の樂園」を人々に説き、多くの賛同者を得た。そしてこの預言者の言葉は今日でもパラグアイの森でみじめな生活を送っているグアラニ人たちの間で生きているという（クラステル：二六六―二七二）。

首長が世襲的に決められる首長制社会の例としてトロブリアンド諸島（パプア・ニューギニアの北東）の例を挙げることができ。この社会はヤム芋の栽培を行う人々が構成するが、階級なしカーストをもっている。最も高いカーストの男は村の長老のなかでも筆頭となり、村の重要問題を検討し、合意によって結論を出すうえで主導的な役割を果たす（マリノフスキー：一三二）。マリノフスキーによれば、「一夫多妻婚ができるという特権を利用して、首長は食物や貴重品の形でいつもゆたかに富の供給を受け、彼の高い地位を維持するためにその富を消費する。……習慣にしたがって支払いを行ったりなどして、その富を消費する」「拒むことのできない奉仕に至るまで、あらゆることに……支払いを行なわねばならない」（マリノフスキー：一三三）。首長がその地位の特権として人々から富を得、その富を人々に配分する

このような交換を再配分（redistribution）というが、この場合の再配分は限りなく互酬的であるといえよう。首長は「ゆたかに富の供給を受け」る一方で、「その富を消費」し、さらに「支払いを行わねばならない」からである。人々が首長に食物や貴重品を貢納するのも義務ならば、首長が人々に支払うのも義務なのである。もし首長の再配分が不十分だと人々が感じたときどのようなことが起こるのかについてマリノフスキーは何も記述していないが、おそらく人々はひそかに非難するだろう。それは首長の威信に少なからぬ影響を与えるだろう。

文明社会では再配分が互酬的でなく、権力が取り仕切る一方的な再配分となる。プレ文明の互酬的な再配分がどのような経過をたどって一方的な再配分へと転化したのか。権力の発生、言い換えれば支配と服従の関係が生まれたときだが、それはどのようにして発生したのであろうか。先のトゥピ・グアラニ人社会の例で考えると、首長が「孤独を強いられ、死に至る、展望なき戦いを強いられ」ることもなく社会とともにあったが、外部社会から何らかの脅威が迫り、社会が首長に権力を与えたときだっただろう。外部からの脅威が大きければ大きいほど、そして長期化するればするほど、首長の権力は大きくなる。しかしながら、そうした脅威の背景に財の偏りがあった。そのような脅威はプレ文明で

はなく文明社会になって初めて起こつただろう。権力の発生因についてクラステルは人口増加と集中に求めようとしている（クラステル：二六六）が、それだけでは十分ではない。財の集中と集積も考えなければならぬ。それは狩猟採集経済ではなく農耕牧畜という生産を始めるようになり、より安定した生活が営めるようになってからであった。そこでは、社会はますます複雑になり、集団と集団の間の関係も複雑になり、遠距離交易も行われ、物質文化も豊かになり、食料生産も増加した。権力の発生は必然だった。

三 文明をめぐって

1 文明とは何か？

文明の特性についてはさまざまな特徴描写から知ることができ、とくにチャイルドが挙げた文明の特徴はしばしば言及され、参考になる。考古学者チャイルドは「新石器革命」（「農業革命」）に続く「都市革命」によって文明が誕生したという。彼は都市、分業、階級、租税制度、公共建造物、文字、予報科学、経済制度などの出現が文明の特徴だとした（チャイルド：五八一―〇〇、レットファイルド：三二）。

都市であれ、国家であれ、そうした構築物で自らを守り、閉じ込めるといふ状態を「異常」と思う人はいないだろう。文明においては普通のことだからだ。しかしプレ文明との比較で考えれば、不思議なことに見えてくる。一体何から自らを守らなければならないのか。言うまでもないが、人間という同種の生物から守るわけである。しかし同種の生物はもともと仲間であり、敵ではなかったはずである。現代の人類学では、現在世界に散らばるホモ・サピエンスはアフリカに住んでいた人々を祖とするというアフリカ単一起源説が有力だが、そうだとすれば七〇億人に達しようとしている現生人類はいわば遠縁の「兄弟姉妹」のはずである。なぜ敵同士になってしまったのだろうか。もちろんプレ文明においても女性や縄張りをめぐりいざこざはあっただろうが、文明ではまた別の要因が絡み、それが事態を深刻化させた。定着生活に伴う財の増加である。仲間を敵に変えたのはそうした文明ではなかったか。そしてその文明が敵から自らを守ることを教えたのではなかったか。このように、文明は相反すること、矛盾すること人間に行わせている。文明は複雑なことを人間に強いているようである。

本稿では文明をチャイルドが示した都市発生以降の文化の意味で用いることにする。その意味での文明は文化人類学などでは広

く使われ、The New Encyclopaedia Britannicaなどの事典もおおむねその意味で使われる。The New Encyclopaedia Britannicaでは、いくつかの留保はつけながらも、とくにチャイルドの「新石器革命」を経て「都市革命」で開花する文明についてやや詳しく説明している。しかしプレ文明との比較はないから文明とは何なのかという議論もない。そのことも関連して定義らしき記述も見当たらない (The New Encyclopaedia Britannica, 16: 62-63)。他方、Wikipediaでは「文明はしばしば広義の文化と同じように用いられているが、最も広くは農業文化と都市文化が複合した文化を表わす記述的用語として用いられている。社会的複雑さと組織の程度の高さと、さまざまな経済的文化的活動によって他の文化と区別される」という説明がなされている。ここで「他の文化」といっているのはいわゆる「未開文化」を意味しているらしいので、文明の特徴は「未開文化」より社会が複雑で組織の程度が高いということになる。しかし比較の対象となっている「未開文化」についての説明はないから文明との異同は必ずしも明確ではない。Wikipediaでも定義らしきものはない。それに対してEncyclopaedia Americanaでは「文明という言葉は大多数の社会より大規模で複雑な社会であり、弱小で「未開な」社会にくらべて、自然環境に対しても人的環境に対しても、広範

囲に支配する社会だけを指すということでは合意できるだろう」(Encyclopaedia Americana: 2) という踏み込んだ説明がある。「大多数の社会」といっているのは「未開社会」のことを意味しているようだが、この「定義」は自然と人間に対する「支配」を明記しており、文明の本質に触れている。とはいえ、規模や複雑さ、あるいは「支配」の程度など「未開文化」と比較した特徴を述べているにとどまり、定義とはいえないのではないかと思う。

これらのEncyclopaediaでの程度の記述しかできないのは文明に関心を集中するあまりに「未開文化」への関心が欠落しているからであろう。「未開文化」への関心の欠如は人類の文化全体への関心が欠落しているからともいえるし、それはすなわち人類そのものへの関心の欠落を意味していると思われる。また、Encyclopaedia Americanaの「定義」は「文明」と「社会」を同一視しており、文明という言葉を使う意味がなくなってしまうのではないだろうか。それも問題だが、より重大な問題は、「The New Encyclopaedia Britannicaなどとともに、往々にして「非文明」との明示的な比較を欠いたままに文明が論じられてきたところにある。

最も古い文明が発生したのは紀元前四〇〇〇年紀の後半であった。チャイルドが挙げたように、文明は居住地の拡大、貢税制

度、大規模な公共事業、記文技術、算術と予報科学、交易を伴う経済制度などによって特徴づけられる。シュメールの文明は三〇〇〇年BCには大規模な運河や神殿（ジググラト）と城壁に囲まれた都市を構築し、文字をもっていた。プレ文明では見られなかったこれらの特徴は、レッドフィールドが強調したように、技術の発達によってもたらされた。

2 通俗的文明観

文明という言葉が一八世紀のヨーロッパで使われ始めたときから、当時の上流階層が模範とするような「より良き状態」や（都会の）優れた、洗練された、高い生活水準、あるいは、自己抑制やマナーの良さなどを意味していた。このような文明概念は今なお広く根強く使われ続けているのだが、そうした通俗的な使い方に従う限り、文明論は人文社会科学と相容れない。なぜならば文明論は価値観から自由に展開されなければならないからである。そうでなければ「どちらが良いのか」とか「どちらが優れているのか」といった価値観に振り回された感情的な論争となり、客観的であるべき科学の領域を越えてしまう。この点については後に文化相対主義に立って文明を論じることの重要性を述べるところで触れることにする。

人文社会科学の文明論を展開するために、まず通俗的な「文明」の「文明中心主義」性あるいは「ヨーロッパ文明中心主義」性を批判するところから始めたい。文明を進歩した優れた文化と見る文明中心主義は、近代ヨーロッパが自文化を人類史の頂点に立つ文化と位置づけた一九世紀の自民族（自文化）中心主義（ethnocentrism）に他ならない。ヨーロッパ文化を最高の文化と位置づけ、それを格別な文化として誇示するためにヨーロッパ人は「文明」という用語を貼りつけたのであった。

通俗的な「文明」はまず辞書を引けばよく判るだろう。広辞苑には「①文教が進んで人知の明らかなこと。②(civilization)都市化。生産手段の発達によって生活水準が上がり、人権と機会均等などの原則が認められている社会、すなわち近代社会の状態」と説明されている。このように、「進んで人知が明らかなこと」とか、「近代社会」という通俗的な文明理解で終わっている。なお、②の冒頭には「(civilization)都市化」とあるが、その後の「生産手段の……」という説明との間に乖離が見られる。というのは「生産手段の……」は（ヨーロッパの）「近代社会」の説明ではあっても、「(civilization)都市化」の説明にはならないからである。この項目を書いた執筆者は（ヨーロッパの）近代社会と「文明」を同一視する一八世紀以来の文明概念に引き込まれて

しまったようだ。リーダーズ英和辞典では、三番目に「(砂漠・僻地などに対して)人口密集地、都会…文明の快適な生活、都会生活」とあり、やはり「快適な生活」つまり「より良き状態」と説明している。また、Oxford Advanced Learner's Dictionaryでは最初に a state of human society that is very developed and organized とあり、上記の辞書と似たような説明がなされている。

広辞苑のように近代ヨーロッパの文化を「文明」と呼ぶ使い方は、例えばブッシュ元米大統領がイスラーム・テロ集団に対して「野蛮の文明への挑戦」といったときの「文明」と同じである。彼の「文明」が欧米文明を指しており、アジア・アフリカ・ラテンアメリカの諸文明をも含んだ文明でないことは、彼の所論を聞けば明らかであるが、彼のように、「文明」すなわち「ヨーロッパ文明」すなわち「最高の文化」とみなす「文明中心主義」ないし「ヨーロッパ文明中心主義」は欧米人だけでなく、今なお全人類を牢乎として呪縛している。それはあまりにも強固であるがゆえにほとんど誰も疑いを差し挟めなくなっているほどである。

3 「ヨーロッパ文明中心主義」を受け入れた日本人

「ヨーロッパ文明中心主義」が欧米人に対して非欧米蔑視の価

値観と態度をとらせているのは、コロンブス以来この方、欧米の非欧米支配すなわち植民地支配の長い歴史とそれを正当化する言説が彼らに染み込んでおり、その染みを落とすことがかなり難しいからだろう。この困難を乗り越えるには自己を振り返る反省が必要だが、一部の知識人を除いてはまだできていない。しかし、つそう悲劇的なことは非欧米人である日本人にも非欧米蔑視の価値観と態度が見られることである。悲劇的というのは結局自らをも蔑視してしまうことになるからである。事実、多くの日本人に強い欧米コンプレックスが見られる。このようなコンプレックスは明治の開国以来ずっと染み込んでおり、さらに太平洋戦争の敗北で追い打ちを掛けられ、習慣ないし文化(狭)となってしまうたようだ。それは特に年配の政治家や財界人や研究者に強い。それゆえにそうした日本人が「文明」を欧米人と同じ意味で使ったとしても不思議ではない。欧米追随、脱亜入欧のスタンスはなかなか消えない。植民地時代のインドネシアのように、非ヨーロッパ世界の人々はヨーロッパ文明の自画自賛を受け入れるよう強制された。近代日本もその例外ではない。もともと、強制されたのかどうか、むしろ進んで受け入れたのではないか、ともいえる。だがそのとき「脱亜入欧」の掛け声とともにアジアを蔑視することも忘れなかった。ヨーロッパ礼賛と非ヨーロッパ蔑視はコイン

の裏表の関係にあるから無理もない。それが自らをも蔑視した。

自らを含むアジア蔑視は近代アジアに大きな災いを引き起こし、その後遺症は太平洋戦争の終結以来すでに半世紀以上経ち、ようやく韓国、台湾、中国に対する認識が変わりつつある現下とはいえ、今もなお、残念ながら消えていない。筆者は長いことインドネシアに対する日本人の関心の度合いを見てきたが、一部の人々の間にインドネシアの伝統芸能（ワヤンやガムラン音楽など）や食文化（ナシゴレンやバミゴレンやサテなど）への関心が高まっているとしても、ほとんどの人々は欧米ほどには関心をもっていないと強く印象づけられている。インドネシアの人々の日本に対する関心とまさに正反対である。アジア蔑視の後遺症がこうした事態を引き起こしているのであろう。日本政府はアジアをはじめ諸外国から毎年たくさん留学生を招き、日本の大学で学ばせている。しかし憧れてやってきた多くの留学生が日本人の欧米偏重と非欧米への蔑視ないし無関心を知って失望し、中には反感を持つ者さえいる。奨学金を与えてくれる日本への感謝の念を持ちつつも、日本人が彼らに対してとる偏見に満ちた冷たい対応でそれも消えてしまう。勿体ないことおびただしい。一刻も早くこうした事態をなくさなければならぬが、後遺症は日本人の骨の髄まで染み込んでおり、簡単に解消できるとは思えない。

ヨーロッパ礼賛の気風は常態化してしまったといってもよいが、それはたとえば茶髪の流行に見られるし、最近非常に目につくヨーロッパ人のような名前、英語やフランス語やイタリア語などをローマ字やカタカナで表示した商品名や企業名や商店名などにも見られる。また、ヨーロッパ「文明」と同一視されたキリスト教も礼賛の対象となつて久しい。ホテルに設けられたチャペルで行う結婚式は人気があるそうだが、その一つの例である。いわゆる「ミッシヨン系」といわれている学校の異常なほどの人気の例もある。⁴ただしキリスト教そのものへの関心はなく、単なるヨーロッパ礼賛に過ぎないからミッシヨンの高校や大学に入学してもキリスト教を学び、洗礼を受けたいという生徒や学生はほとんどいない。ミッシヨンの学校は欧米語に強いという評判も高いためから英語をはじめとしたヨーロッパ語への学生の憧憬に込めることになる。全国のどこにも英会話学校があり、フランス語やイタリア語やスペイン語なども繁盛している。最近では中国語も人気があるようだが、憧れの対象ではなく経済的動機から学ぶという点でヨーロッパ語とは異なつた外国語ではないだろうか。英語の人氣は抜群で、英語が母語の外国人は、英語教育の専門家だけでなく、容易に英語教師の職につけるし、給与も高い。国際語となつた英語ができることは身につけるべき条件の一つかもしれない。

いが、何といっても明治以来のヨーロッパ礼賛が背景にあらう。最近知ったことだが、英語熱はついに〇歳児に英語の教材を買い与え、教育するという親まで生んでいるという。〇歳児は日本語もまだできないし、親の押しつけに乳児が拒否反応を示すのも当然だろう。どういう理論的根拠に基づいてこうした早期教育をするのだろうか。子供にとっては災難でしかないと思う。

4 ヨーロッパ文明の大罪

欧米人が自画自賛する欧米文化を非欧米人が取り入れることは一般に「近代化」と呼ばれている。そして「近代化」は無条件に良いこととみなされてきた。だから明治の開国以来、何の疑問もなく「文明開化」、「脱亜入欧」の掛け声のもと、ひたすら「近代化」に努めたのであった。しかし近代欧米が作り上げた文化すなわち「近代文明」は本当に「良い」文明だったのでだろうか。イギリス、フランス、オランダあるいはドイツなどの西欧諸国が作り上げた芸術や科学そして産業には目を見張るものがあったし、多くの人々の目や耳を楽しませ、科学がもたらした新たな知識は人類に大きく貢献したことは確かである。

しかし、そうした文明は非欧米からの凄まじい収奪の上に立って成り立っていたことを見逃してはならない。その苛酷な非人道

的所業を知れば、もはやヨーロッパ文明を手放して礼賛することはできなくなる。文明の美しい花は、その下にある茎や葉や根、さらに根の先にある土壌があつて初めて咲く。フェルメールやレンブラント、蒸気機関、エッフェル塔、民主主義の理念などをヨーロッパ文明の花とすれば、その花の根はアジア、アフリカ、ラテンアメリカの大地と庶民から養分を吸い取っていたのであった。その吸い取り方はきわめて苛酷を極めた。そのために吸い取られた地域と人々は衰退を余儀なくされた。その後遺症は、貧困、無学文盲や基礎教育の欠如、産業の未発達、自立心の欠如などの形で今も残っているのである。それどころか、形を変えた収奪すなわち欧米や日本などの「先進国」による新植民地主義、あるいは国内植民地主義が更なる追い打ちを掛けているのである。「発展途上国」がなぜ離陸できないのか。「先進国」はよく考える必要がある。「彼ら」の問題なのではない。「先進国」の問題なのであり、「先進国」に責任があるのだ。それに気づかなければ、「先進国」の名に値しまい。「先進国」が「先進」であり続けられるのはなぜなのか、よく考える必要がある。新植民地主義という収奪のうえでの「先進」だということ、それは文明の所業、だということを知る必要がある。

ところで、インドネシアやマレーシアやフィリピンにいて不思

議に思うことの一つに、かつて植民地化され、苛酷な支配を受けたこれらの国々の人々、とくに知識人に欧米礼賛の気持ちが高いということである。たとえば筆者がよく知るあるインドネシアの元大学教員に流暢なオランダ語と英語を話す女性がいるが、彼女はそれを非常に誇りにしていた。かつて数百年にわたって苛酷な支配を続けたオランダに、なぜ彼女は自らを近づけようとするのか、筆者は強い違和感を覚えたものだった。実は、彼女の父はウエダナ (wedana) だった。ウエダナというのはオランダ政府の意を受け、現地の人々を支配する県長、郡長に次ぐ高位の役人だった。いうまでもなくオランダ政府から厚遇を受けた人たちである。こうした高位の役人たちの子弟はオランダ語をはじめ当時の最新の知識を身につける教育を受けることができた。しかし、その教育は、プラムディア・アナンタ・トゥールが彼の小説『人間の大地』で一人の女性の口を借りて叫んだように、徹底的にオランダを賛美し、インドネシア人であることを忘れさせるような教育だった。『人間の大地』でその女性はいう。「私は学校というものにはまったく行ったことがありません。だから、ヨーロッパを賛美するように教えられたこともありません。学校というところは、何十年通おうが、どういうことを勉強しようが、その教育理念は同じです。彼らヨーロッパ人を底なしに賛美し、崇拜するこ

と。もはやわたしたち自身が何者で、どこに位置しているのかわからなくなるまで、徹底してそういうふうにならねばならぬ、それが学校教育の理念なのです」(プラムディア二二八五)。

ヨーロッパ文明中心主義はトインビーも批判していた。彼は、五〇〇年前に始まる西欧の世界制覇によって歴史学者をはじめ多くのヨーロッパ人が「文明単一説」をとっているが、それは誤りだと批判する。「文明単一説」というのは「文明の流れはただ一つ、われわれ自身の(傍線は筆者)文明があるだけであって、他の文明はすべて、それに流れ込む支流であるか、さもなければ砂漠の砂の中に消えてしまった」という考え方である(トインビー一七五)。「我々自身の」とは「ヨーロッパ人の」という意味である。彼は、このような見方は「(経済や政治の)物質の領域における西欧文明の全世界成功に起因する迷妄」、「自己中心の迷妄」、「変わらない東方」の迷妄、「直線的に進行するもの」として考えられた進歩の迷妄の結果であるという(トインビー一七四一七五)。トインビーが『歴史の研究』を著わし始めた一九三四年からすでに七〇年以上の歳月が流れているが、上記の四つの「迷妄」は今なお強く世界を支配し、過去のものとなっているわけではない。「物質の領域における……迷妄」は今や「発展途上国」を含む全世界の人々が追いかけられるようになっていて、「自己中

心の迷妄」からもまた多くの人々は解放されていない。「『変わら
ない東方』の迷妄」はサイドが糾弾して世界に注目されるほど
に依然として根強く、直線的進歩史観も発展主義者の金科玉条と
なっているのである。

ところで、トインビーは「西欧を基礎とする経済的統一に引き
続き、同じく西欧を基礎とする政治的統一がほとんど同じ範囲に
わたって実現」した「事実」を「成功」と呼んだ（トインビー…
七四七五）。確かに西欧人であるトインビーから見れば「成功」
だったかもしれない。だが、ひるがえって非欧米人から見れば、
西欧の「成功」は非道な「反人間的行為」そのものだったのであ
り、数々の強奪や殺人などを含む犯罪だったのである。

ヨーロッパの犯罪の一例としてインドネシアの例がある。イン
ドネシアでは、たとえば一八三〇年から始まったジャワ農民に対
するオランダ政府の「強制栽培制度 (culturstelsel)」という収
奪がとりわけ苛酷を極め、ジャワ農民を疲弊させた悪政だった。
オランダ人の行政官であったダウエス・デッケル（著書はムルタ
トゥーリの筆名で著わした）は、後に一九世紀オランダの最高傑
作と呼ばれるようになった名著『マックス・ハーフェール』で
自国を「盗つ人国家」と呼び、当時の国王（ウィレム三世）に訴
えかけた。彼は書いた。「海のかなたでは三〇〇〇万を越すあな

たの臣民が、あなたの名において虐待され、搾取されている」と
（ムルタトゥーリ…四九〇）。オランダの所業は強盗や虐待だけでは
ない。農民を奴隷化したり、殺したり、悪行の限りを尽くしたの
であった。もちろん、それはオランダに限らない。スペイン、ポ
ルトガルはラテンアメリカで、イギリスは南アジアや東アフリカ
で、フランスは西アフリカや北アフリカで、恐怖の独裁者として
振る舞ったのである。

トインビーは natives という言葉を当てられている人々が「文
化的色彩を抜きにして……とらえている……」とし、「かれらを
……野生の動物として、すなわち、その土地特有の動植物の一部
として見るのであって、われわれと同じ感情をそなえた人間とし
て見ていない。……彼らを絶滅させ、……馴化して……品種改良
をしているのだ……少しもかれらを理解していない」（トインビ
ー…七五）と述べ、欧米人の非欧米人に対する扱いを非難した。
彼の非難は正しい。敬虔な宗教者であったトインビーだからこそ
同胞たちを非難できたのであろう。しかしその彼がなぜ西欧の植
民地支配を「成功」などと言いきれたのか。偉大な文明史家トイ
ンビーも自らの文明の根底に「地獄」を見ることはできなかった
ようだ。

5 文化相対主義による文明中心主義批判

「文明中心主義」ないし「ヨーロッパ文明中心主義」は自民族（文化）中心主義に他ならないということはすでに述べた。この「自民族（自文化）中心主義」は自らの文化を基準に他文化を評価する態度で、一般には自文化を高く評価し、他文化を低く評価する。ただ、既述した通り、明治になって以来ずっと見られた日本人のヨーロッパ礼賛は自文化を低く評価しているので一般的傾向から外れる。当然ながら、そうした自文化を低く見る価値観と態度に対する反発は何度も繰り返し起こり、自民族中心主義（日本主義）が高揚した。双方とも問題があった。どちらもヨーロッパ文明中心主義の軛から解放されていないからである。

文化に優劣をつけるとすれば、それはある価値観に基づいてなされているはずで、価値観は文化によって異なるから文化の優劣判断は文化の数ほどあることになる。したがって絶対的な評価などというものはあり得ない。このように文化を見る見方を文化相対主義 (cultural relativism) といい、アメリカの人類学者ボアズやその弟子であったミードやベネダイクトらが唱えた公平で客観的な文化観である。文化相対主義は自文化であれ他文化であれ、それへの判断はある基準をもとにしていることを認識しなければならぬという自省性が根底にある。この自省性は自文化を

見つめ直し、自らを省みさせるという利点を持ち、文化間の対話に道を開く。

ヨーロッパ文明中心主義に対しては遊牧・牧畜文化からの批判もある。ヨーロッパ文明は定住生活の上に成り立っているから定住生活や、それを可能にする物品の豊かさを基軸にして文化を見る。それゆえ、遊動生活を送り、それに適応的な物品の少ない文化を「低い」「劣った」「遅れた」文化と見るだろう。ジャック・ルグランは遊牧・牧畜の文化が「長い間、原始的、あるいは『野蛮な』ものとして……『通常の』あるいは『普遍的な』人類の発達順序から外れているものとして規定され、分析されてきた」（ルグラン・八四）と述べ、定着文化の偏見を批判しているが、もつともである。

文化相対主義の観点からすれば、文明と文明の間だけでなく、プレ文明と文明の違いも、優劣や「発達（成熟）した」、「未発達（未熟）な」といった差別的な見方で見るのは、文明を基準にした文明中心主義の差別的な文化観であり、不当ということになる。ともに文化なのであって基本的に差はない。言い換えれば、プレ文明も文明も、ともに公平に肯定的に見なければならぬということである。諸文化をそのように見ればじめてプレ文明は（文明より）劣った未発達な文化であるとか、プレ文明はやが

て文明へと発展する未熟な文化であるといった「発展史観」の軌から解放される。

6 文化は変化するが「発展」はしない

プレ文明と文明の間に優劣の差も発達未発達（発展未開）の差もないと筆者は考える。技術の発達はあつた。しかし文化にはない。既述したように技術は変化発展性や累積性があるし、技術の分野は限られているので技術だけに限定すれば発達の程度は明らかに見てとれる。しかし文化は人間の「心身」⁽⁵⁾全体との関係で考えなければ発達したのかどうかの判定はできない。仮にある分野で、人間の「心身」にとって望ましい「発達」が見られても他の分野ではむしろ反対に望ましくない結果を随伴しているかもしれない。たとえば内燃機関の車両の普及は確かに人類に望ましいものをたくさんもたらしたが、その反面、事故を多発し、大量の化石燃料を消費して資源問題を引き起こす一方、CO₂、HC、NO_xなどを排出して人体を害し、大量のCO₂を排出して温暖化問題を引き起こす、あるいはまた、歩くという運動をさせなくなったために人々を不健康にしている、など望ましくない現象を惹起しているのを見れば、このことは一目瞭然だろう。

このように見れば、文化というものに、人間の「心身」にとつ

て望ましいものをもたらしただといった意味での発展発達という言葉はなじまないのではないだろうか。文化にあるのは増殖的変化だけであると考える。増殖的変化とは文化の厚みといつてもよい。たとえば、無土器文化、土器文化、鉄器文化を比較した場合、その間に「発展」の図式を当てはめて、普通には無土器文化より土器文化そして鉄器文化がより優れた文化だと理解される。

しかし無土器文化の人々でも「それなりに」生きることは可能だったのであり、不都合があつたわけではないし、まして土器がないから、あるいは鉄器がないからといって減んだわけでもない。ただ、土器のある文化は、それを使って物を貯蔵したり、煮炊きできるから土器がない文化よりも厚みがあるとはいえる。鉄器文化にしても同様である。確かに、貯蔵したり煮炊きができるから土器文化の方が無土器文化よりも、ある点では、利点がある。しかし移動しなければならぬようなときには却って「重荷」になる。移動を繰り返すようなプレ文明にあつては土器を作る必要性もなければ発想そのものもなかっただろう。だから土器文化が無土器文化よりも「よりよい生活」を可能にしているとはいえない。無土器文化では焼く、蒸す、燻すといった調理文化だけでも十分だったのでないだろうか。鉄器文化にしても大がかりな製鉄が必要だからそのための施設を造らなければならないし、エネ

ルギーも人力も欠かせない。そうした施設を造ったり、エネルギーを確保することができない状況になれば、製鉄はできない。とはいえ、人類は長い間土器もなければ、鉄器もない時代を「それなりに」生きていた。絶滅したわけではない。むしろ土器も鉄器もある現代こそ絶滅の危機に瀕しているのであり、それが文化の厚みの結果だとすれば、何のための文化だったのかと思わざるを得ない。

7 発展史観の呪縛からの解放

問題は、現代を生きる人々のほとんどがこの「発展史観」に囚われ、急かされ、苦しんでいることである。まるで全人類が挙ってマラソンコースを先へ先へと目指して走っているかのようである。GDP世界第一位だとか、「経済大国第二位から転落した」とか、〇〇が世界第一位だとか、順位がつけられる。世界一の年収を得たのは〇〇で、日本人では△△が第〇位に入っただとか、順位づけは個人レベルにまで及ぶ。メディアが好んで取り上げるギネスブックにはどんな種目が載っているのだろうか。世界は競争で明け暮れる。日本もその例外ではない。筆者が知る学生たちは、日本では一本のベルトコンベアーのようなものがあってそれに乗れない者は落伍者として弾き出されそうな恐怖感を感じると

いう。彼らが強調することは日本社会の画一主義だが、それと同時に、「前に進まなければならぬ」という発展主義をも暗に批判しているのではないか。競争社会の落伍者に転落する恐怖感は今や国家から個人に至るまですべてが抱いているようだ。

携帯電話という通信手段についても私たちの観念は「発展」に呪縛されている。携帯電話がなかった二、三〇年前と現代を比べれば、我々の通信手段は格段の進歩があった。ましてや狼煙しかなかった時代と比べれば雲泥の差がある。確かに、通信技術に限れば「発展」は見られただろう。だが、技術だけに限定せず、広く文化という観点から見た場合、人間の「心身」にとって発展があった、つまり人間の「心身」に良いものばかりをもたらしたかといえば、必ずしも首肯できない。携帯電話が普及したためにも電話に縛られるという事態が生じている。縛りは車の運転中でも続き、集中力を必要とする運転中でも電話に出なければならず、そのために事故が頻発するという事態を招いたことは記憶に新しい。たくさんの乗客で混む電車のなかでも携帯電話に呼び出され、それが原因で乗客同士の間でトラブルが発生するという事態も起こる。携帯電話が普及すると誰でも携帯電話を持つことが前提となり、携帯電話をもっていない人とどう連絡してよいか途方に暮れるという事態も生じる。一体、携帯電話は私たちの

へ心身』にとって良かったのだろうか。携帯電話のメリットを完全に否定できないとしても、それはどのような社会にとってのメリットなのか、ということを考えなければならぬ。言いかえれば、別の社会では携帯電話のメリットはデメリットに転化してしまうかもしれないということである。筆者は、経済主導の社会にとってメリットはあるだろうが、人間の「心身」にとって必ずしもメリットがあるとは思わない。「文明の利器」は必ずしも万能ではない。

とはいえ、携帯電話が広く普及し、それを欠いては成り立たなくなりつつある現代社会で携帯電話を持たないというのは、持たない個人だけでなく、社会的にも支障を来すという問題があるから、携帯電話の不所持から逃れるのは難しくなっている。このよくな財は公共性を帯びており、社会が運命を共にしていることを思い知らされる。そこからの自由はどう確保されるのだろうか。アメリカで発行されている文化人類学の教科書の表紙に駱駝に乗った男が携帯電話で話をしている姿の写真が載せられている。砂漠を移動する伝統文明にとっても最新の「文明の利器」は必要ということなのだろう。電話回線が極端に不足しているインドネシアでは携帯電話が爆発的に売れている。とくに若者たちにとって必需品のようである。もちろん電話代がかさむからといって

MSでのメールの送受信に使用しているようだが、携帯電話の普及ぶりに驚かされる。

8 文化は多様に変化する

確かに、文化は変化する。しかしその変化は一直線を進み、やがてゴールに至るといような変化なのだろうか。筆者はそうした「発展史観」の根底にユダヤ・クリスチャン的終末論があるのではないかと考えているが、そうだとすれば、その軛から脱却した別の見方も考えられるのではないか。

筆者は文化の変化に決まった方向はなく、二つの自然すなわち「内なる自然」と「外なる自然」がどのような関わり合いを持つのか、その関わり合いの変化で見るべきだと考える。文化の変化はあくまでも二つの自然の関係の変化であり、そこにさまざまな形態があり、それらを単純化して捉えるのではなく、さまざまなありようをそのままに捉えてみたらどうかということである。ダーウィンのいう「変化を伴う出自 (descent with modification)」という意味での進化として捉えるということである。それは、文化変化の多様性を認める文化観であり、紹介したような「文明の流れはただ一つ」という発展史観と対立する。

四 文明の構造

1 立体構造をもつ文明

権力が発生したとき再配分は権力者の支配下で行われるようになった。文明は支配と被支配からなる立体的構造をもつようになった。平等なプレ文明が二次元構造から成るのに対して二次元的

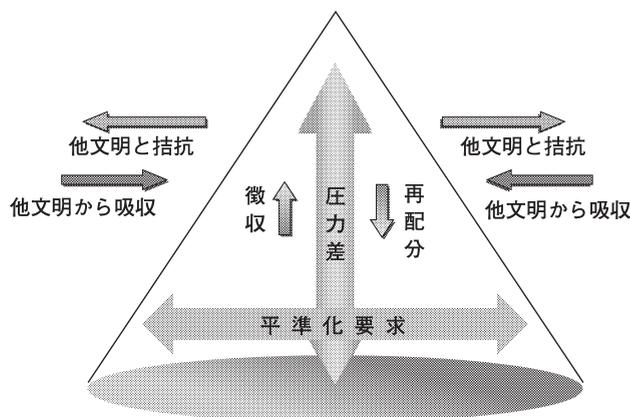


図2 文明の立体構造

になったわけである。図2に示したように、文明は圧力差によって作動する。レイヴィストロースは、「文明」ではなく、「熱い社会」という言葉を使っているが、彼がいう「熱い社会」とは明らかに本稿の文明に当たる。彼は「構成人員の一部による他の一部の搾取行為に基づいている社会」（シャルボンエ…三〇）である近代社会を蒸気機関にたとえた。巧みな比喩だと思ふ。彼によれば、近代社会は「汽鐘（ボイラー）と凝縮器（コンデンサー）との温度差によって作動」する蒸気機関（シャルボンエ…三二）のようなもので、摩擦や過熱がなければ理論的には最初に与えられたエネルギーで際限なく作動する時計のような未開社会（冷たい社会）とは異なるという。

「熱い社会」は単に近代社会だけではない。事実、彼は「社会構造という観点からしても……作動するためにポテンシャル・エネルギーの差を利用するわけで、その差は……奴隷制とか農奴制とか、階級の分立」といった「構成人員の社会階級のさまざまな形態によって実現される」（シャルボンエ…三二）と述べ、近代社会だけでなく、広く文明社会全体を含んで考えている。圧力差で作動する文明は本質的に矛盾を抱え込むことになった。そこに問題が発生する。

圧力差で作動する文明は、平面的なプレ文明社会とは違った見

方で見ることがある。文明は、上部だけでなく、下部も見ることが総合的な見方で見なければならぬ。文明の立体性とその見方についてはすでにやや詳しく論じたが（染谷二〇〇七：四一六）、今、ここでも再度、強調しておきたい。

2 矛盾を解消する運動

文明社会では権力者たちへの反抗は至るところで見られたし、それは今日ますます激化している。それは国境内にとどまらず、国境を越える。権力者による収奪が国際化しているからに他ならない。

矛盾を解決する運動は平準化を要求する圧力として作動する。クラステルが紹介した預言者の「悪なき大地」や「地上の楽園」を求める運動は別の地に移住しようというそれであった。既存の社会の内部に楽園を築こうとしたわけではないから大きな争いはなかったようだ。生活装置がさほど大きくなければ別の地に楽園を築くということは比較的容易だっただろう。また、旧約の預言者やブツダとその弟子たちのように都市という文明を拒否し、都市の外に住むことを選んだ人たちが文明社会を糾弾した場合もそれが可能だった。しかし農耕や商工業に従事し定住生活を営む文明社会の庶民では不可能だろう。彼らも定住生活を営んでいたか

らである。勢い、社会内部での平準化要求運動となる。とりわけ劣悪な状況におかれた人々の抵抗運動はどの文明であれ枚挙にいとまがないが、その要求は必然的に軌轢を生む。

3 文明のますます強まるダイナミズム

圧力差を内包する文明は、プレ文明社会の「工学的機械」に對する「熱力学的機械」にたとえられたように、ダイナミズムに満ちている。それゆえに速い変化がつきものである。前期旧石器が一〇〇万年の間その形をほとんど変えることなく作られ続けたのは文明の目から見れば信じがたい。同様にプレ文明の目から見れば、文明の変化の速さは信じがたいだろう。筆者は緩やかに時間が流れるジャワ社会に身を置きたびに文明の速さとの違いを感じている。もちろんジャワ社会とプレ文明ではなく、れつきとした文明の中にある。だが、ジャワ社会にしばらく身を置いていると、あたかもプレ文明の中に身を置いているかのような気持ちになる。おそらく「ブンガワン・ソロ」のような半世紀も前の歌が今も聞こえるところに変化しない時間を感じるのだろう。伝統的なワヤンの調べが夜のしじまの中、町のあちこちから聞こえてくるときにもそれを感じる。自転車やベチャ（人力車）や牛車がゆったりと通り過ぎるのを見ると、時間がゆっくり過ぎるのを感じ

じる。思えば、まだ新幹線も東名高速もなかった半世紀ほど前の日本社会も時間がゆっくりと流れていたものだった。現代文明はますます私たちの時間を圧縮している。

私たちはまさにそうした速い変化の中を生きているのである。ホモ・サピエンスが誕生してから一六万年土四万年の年月が流れた。その間、ホモ・サピエンスの「心身」は少ない変化に適合していた。そういう「心身」が今日の速い変化に適応できるのだろうか。人間の「心身」の適応力に柔軟性があるのだろうか。それとも適応力がないためにさまざま問題に悩んでいるのだろうか。

圧力差で作動する文明はその規模が大きくなればなるほど莫大なエネルギーを必要とする。文明の存続にエネルギーは欠かせない。それゆえにエネルギーの確保は死活問題となる。その結果、拡大の傾向は一般的となる。図2でいえば、高さがより高くなり、底面がより広くなるという傾向である。具体的には、支配する領土を拡張し、領民を増やすといった形をとる。あるいは戦争を引き起こし、領土を拡張する、領土化した土地に住む人々を奴隷化して人的エネルギーを確保するというような形をとる。しかし、かつてのように、戦争で領土と領民を獲得する拡張方法は、今日、何度も戦争を経験してきた人類が許すはずはない。現代は

国際社会の目が光っているから他国への侵略は難しい。そこで、未来への平和的な「侵略」の形でエネルギーを補給しようとする方法を講じるようになっていく。現在では多くの国が国債や地方債などを発行し、将来世代に借りを作って（将来世代を犠牲にして）エネルギーを補給しようとする。そこにまた問題がある。

このように文明が圧力差で作動するのであれば、膨張的となるのは必至で、もしそれができなければ、逆に収縮的とならざるを得ない。膨張と収縮の繰り返し。かくして文明は盛衰を繰り返す。いずれにせよ、静態的ではあり得ない。

4 文明は「社会・政治・経済・文化（狭）」の複合

プレ文明の特性はすでに記述した通りだが、それと大きく異なる文化が文明である。チャイルドやレッドフィールドの文明に関する特徴描写から明らかのように、文明は社会のありようから経済や政治や文化（狭）の領域を含んでいる。そこで本稿では、文明を「都市（国家）」という空間に支配被支配の政治と、それに伴う経済と文化（狭）を構築した文化」と定義する。図3に示した通り、社会が文明の基礎であり、経済と政治が文明を作動させ、文化は文明全体をコントロールする。人体にたとえれば社会は全身の骨格と筋肉であり、経済は消化器系臓器、政治は循環器系臓

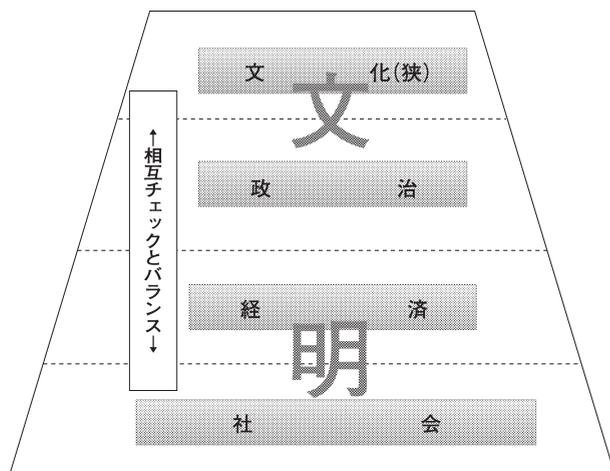


図3 文明の構造

器として文化は神経系臓器ということになろうか。管見の限りでは、これまでの文明論では「文明」について明確な定義が下されたことはなかったように思う。右に示した定義は、より簡潔には、〈社会・経済・政治・文化(狭)の複合〉というような総合概念として表現してもよいが、あくまでも根元的には都市(国家)という人類史上新たに出現した社会体制を基盤としているこ

とを強調しておきたい。二一世紀の今日では、どんな社会集団であれ、都市や国家と無縁ではないから、あえて「都市(国家)」という前提を省略してもよいかもしれない。しかし都市や国家というきわめて人為的な構築物の中に生きるといふ生き方はプレ文明においてはなかった。プレ文明ではその低い技術力に制限されてへ外なる自然に閉じ込められていたものの、自ら作った構築物に自らを閉じ込める(閉じこもる)ということではなかった。こうした構築物で自らを守る必要はなかったからである。あったとしても、文明社会ほどではなかった。守る必要があるものとして女性や縄張りがあっただろうが、常に移動を余儀なくされるようなプレ文明では、基本的に他集団に奪われそうな財は持たなかった。したがって城壁をめぐらして自衛する必要もなかった。しかし文明は財の蓄積のうえに成り立つからその財を狙う侵害者が出てくる。そうなればその侵害者から自らを守らなければならぬ。防衛のための構築物が必要となり、その中に閉じこもることが必要となる。現代世界は、どんな集団も国家によって守られている。防衛力が落ちれば他国の侵略を受ける。侵略を受けないために防衛力を強めなければならない。そのために莫大な財力が必要となるし、ナショナリズムという文化(狭)を高揚させなければならぬ。かくして現代文明は莫大なエネルギーを必要とす

る。

文明の中に住む現代人は、人類史の大半が都市（国家）がなかったプレ文明の時代であったこと、したがってプレ文明の中で生きる生き方がむしろ常態であったことに思いが至らない。文明の中で生きる生き方は人類が最近になって始めたばかりの一つの生き方に過ぎず、それだけが人間の生き方なのではないということを知る必要がある。そのために「都市（国家）」という空間に「という前提は外せない。

5 各領域間のチェックアンドバランス

文明は「社会・経済・政治・文化（狭）の複合体」である。そうした各領域が相互に関連し合っている場が文明である。その場は文明が拡大するに伴ってますます複雑化し、今や文明全体を見渡すことは難しくなっている。その点で初期の文明はまだその規模が小さいだけに全体像が見やすかった。しかし、考古学的資料だけでは細かいことまでは判らないという問題があった。反対に、現代文明はあまりにも規模が大きく全体を見ることが困難になっている。勢い、文明の各領域に視野を限ることになる。学問の細分化は不可避となるが、そこから生じる問題は明らかで、何としてでも解決する必要がある。⁶⁾

文明の各領域は本来的に関連し合っている。それぞれ異なった領域が絡み合うのだからダイナミックな動きは必定である。ましてそれぞれの領域がますます複雑になってくれば、その動きはさらに激しくなるだろう。世界を覆う現代文明にそれは顕著である。

各領域間の関係は、バランスがとれてはじめてそのもとで暮らす人間の「心身」に好ましいものとなるであろう。しかし古今東西の文明で人間の「心身」に望ましいような文明はあっただろうか。一部の人間にとっては望ましいが、大多数の人間にとっては決して望ましいとはいえないような文明ばかりではなかったか。戦争や貧困などに苦しむ人々を大量に生み出すような文明しかなかったのではないか。その意味で未熟な文明ばかりだったのでないか。否、そもそも文明が成熟するということはありうるのだろうか。

世界を覆う現代文明は成熟どころか、むしろますます未熟さを露呈しているかに見える。退行というべきか。「発展した (developed)」とはどういう意味なのか。少なくとも、現代文明といえども「発展した (成熟した)」とはいえないだろう。確かに、技術は発達した。しかしそれをチェックする精神性が発達しなければ文明全体のバランスがとれないはずだが、その精神性はむしろ

後退しているように見える。ここにもアンバランスが生じている。経済領域に主導権を握られた現代文明は、いわゆる「先進諸国」のみならず、「発展途上国」をも混沌の淵に投げ込んだ。今や、「経済成長」は金科玉条となった。政治はそれに奉仕する政治になり下がったし、政治本来の任務であるガバナンス能力を失っている。社会はといえばそれは破壊され、人々は孤立と放浪と混乱に直面させられている。文化の領域はどうだろうか。宗教は力を失って久しいが、反対に「商売繁盛」や「御利益がある」とされる宗派など経済に引きずられた宗教がますます力をつけている。他方、技術はますます強力になった。とくに金融工学のように経済と結び付くものすごい威力を発揮する。一つの例として金融工学が優秀な人材をひきつけて進めた研究結果が金融危機を引き起こし、全世界を大混乱に陥れてしまったことは記憶に新しい。最高学府の大学は今や「就職予備校」になり下がってしまった。学生も学びたいからというよりも、単に良い企業に就職できるからという理由で入学する。だから就職に有利な分野に殺到する。大学はそうした学生を集めるためにテレビによく出る有名人を教員として採用したり、きれいな校舎や豪華なレストラン風の食堂を新築して学生を集めようとする。当然ながら経費はかさむから資産の運用に走る。このように大学も学生も経済に支配され

る事態に陥っている。文化や政治や社会は経済をコントロールできなければならぬ。

もちろん政治にしても同様で、これが他の領域を主導すれば、かつての文明や近時の第二世界あるいは開発独裁体制下の第三世界で見られたような問題を引き起こす。文明内部の各領域間のチェックアンドバランスは、文明においては怠ってはならない。それを怠れば自己崩壊の危機を招くだろう。

6 自立的文明が二つの自然に働きかける

文化もプレ文明から文明へと変貌すると、二つの自然の関わり合いだけではなく、二つの自然と文明との関わり合いも見なければならなくなる。文明に変化したとき文化は自立性を獲得し、二つの自然に大きく作用するようになり、まるで自然と同じように実体化したからである。文明は「内なる自然」にとって「外なる自然」に加えてもう一つの環境となった（環境化）。すでに述べたように、本来は「内なる自然」が生存するための装置（手段）でしかなかった文化が文明の形をとり、それが技術力を高め、力をつけた結果、「内なる自然」に対しても「外なる自然」に対しても働きかける能動者になってしまった。そしてますます自立性を持つようになり、独走するようになってしまった。主客

転倒が起こったのである。

筆者がこうした見方をとるきつかけを与えてくれたのは「精神相の歴史は、数多くの逆境を経て何らかの自律性 (autonomy) を獲得することの歴史だった」(レッドフィールド：三三三) というレッドフィールドの言葉である。彼の問題意識は文明以前に優勢であった精神相が文明の発生とともに劣勢に立たされたものの、のちに「より独立的なものになっていく」(レッドフィールド：三三三) というところにある。しかしこの自立性ないし自律性は精神相だけではないと筆者は考えた。文化が文明へと変化したとき、文明そのものが自立的となり、生みの親である「内なる自然」に對しても「外なる自然」に對してもあたかも主人のような存在へと変貌したのである。それが如実になったのが現代であろう。

レッドフィールドが精神相の自律性を論じたとき、明らかに彼はそれに希望を持っていた。彼は世界大戦直後に世界憲章起草委員会委員(一九四五年―四七年)やアメリカ人種関係委員会委員(一九四七年―五〇年)を務めているが、その活躍ぶりを見ても彼を含め当時の人々が抱いていた人類への明るい希望は理解できる。二度の世界大戦を経験した後だけに当然だった。しかしそれから半世紀以上の歳月が流れ、科学技術の著しい進歩と、その独走ぶりにおののいている今、希望は不安へと変わりつつある。手

に負えそうもないほど成長してしまった文明に希望よりも恐れを感じる人の方が多くなつたとしても当然だろう。精神相の自律性は果たして可能なのだろうか。

五 文明を自立させた人間の欲望

文明はますます技術力を高め、ますます自立性を強めてきた。人はそれを「進歩」と呼び、その波に先ずヨーロッパ人が他者を踏みにした形で乗った。遅れじとアメリカ人が、そして日本人が後を追った。そして現在、Bricsをはじめ多くの「新興国」や「途上国」の人々が続いている。

文明は二つの自然に對してますます優勢になっている。二つの自然はますます劣勢に立たされ、文明と(生みの親である)二つの自然との関係は逆転した(図1参照)。この傾向がさらに強まれば、二つの自然はやがて崩壊するだろう。その予兆はすでに至るところで見られるようになった。人間はそれに気づきながらも波に乗り遅れることを恐れ、文明が強い競争にひたすら明け暮れ、予兆を見ても見ぬふりをしている。

そもそもなぜ文明と自然の位置が逆転したのだろうか。文明が自立し、自然に對して優位に立つようになったのはなぜか。実

は、文明はそれ自身で自立したわけではない。人間の欲望が自立を促したのである。文明を自立させて「甘い汁」を吸って喜ぶ人間の欲望があった。しかも人類全体の中のごく一部の人間の欲望である。それが現在、大衆化し、巨大化しているのである。とくにいわゆる「E.C.O.s」の裕福な大衆の欲望爆発は凄まじい。彼らは「先進国」の大衆と並んで欲望を爆発させている。先ごろ開催されたCOP15は決裂した。そこに見られたのは膨張した欲望だった。欲望爆発はとどまることを知らない。

文明の自立の背後に欲望という黒幕がいた。技術がまだ素朴だったプレ文明の頃、人間の欲望は「足るを知って」いた。正確には、技術力が低いために、そしてまた移動を強いられた生活様式のために、欲望は膨らみようがなかったというべきか。しかし文明の時代に入って一部の人間の欲望が膨れ始めた。文化は、文明という名の、権力者の欲望に應える装置に変身させられた。権力者の欲望は際限なく膨れ上がった。そして権力者は増えた。ヨーロッパ人をはじめとしたエリートたちの要求に、とりわけ高度に発達した技術力と莫大なエネルギーを使って近代文明は応え続けてきた。

現代文明はエリートとなった大衆の購買意欲を刺激し、彼らの膨れ上がった欲望に応えている。莫大な資源が消費され、人力が

つき込まれる。かくして二つの自然は消耗する。欲望が満たされなくなる日は必ず来る。そのとき何が起ころのだろうか。

文明はその技術力をもってますます自立の度を強めてきた。しかし、反対に自律の度はますます弱まっている。自立はしても自律できない文明の結末は火を見るより明らかである。人間の膨れ上がる欲望をコントロールできない文明に別れを告げ、自律的なポスト文明を迎え入れない限り、人類の将来はないと考える。

六 ポスト文明を構想する

人間がまだ足るを知り、儉しく生きていたプレ文明の頃、精霊の声、神の声が聞こえていた。二つの自然は近かった。人間が文明をもったとき精霊が見えなくなった。神の声が聞こえなくなった。聞こうともしなくなった。心は小さくなった。へ心身」のバランスは崩れた。現代文明はそれに追い打ちを掛けている。

人間という動物の根幹は「へ内なる自然」である。自然自身である。へ外なる自然」と対話できてはじめて「生きる」ことができる自然であり、へ心身」である。高度な技術に主導された文明に包み込まれて人の心は自らのへ心身」もへ外なる自然」も見失ってしまった。へ心身」が呼応し合うことも二つの自然が呼応し合

うこともなくして、この世界が立ち行くはずはない、と考える。
 自然同士の呼応あるいは対話、それによってこそ、文明は自律的なポスト文明へと変身することができるだろう。

注

(1) 文明は、しばしば「技術文明」とか「物質文明」と形容されて呼ばれることがある。本稿でも述べる通り、プレ文明と比較すると文明は高い技術力に支えられて成立した文化である。それゆえ文明は技術性ないし物理性が強い。とりわけ高い技術力を基礎に成り立った近代文明ならびに現代文明はその特性が顕著である。「技術文明」とか「物質文明」という呼び方はそうした近代文明ならびに現代文明の特性を表現したものであろう。とはいえ、技術がすなわち文明というわけではない。

(2) 「意識のビッグバン」という言葉は日本語訳の副題としてつけられているが、英語版には「文化の曙 (The Dawn of Culture)」とだけあって副題はない。訳者が意味を汲んで「意識のビッグバン」という言葉を宛てたのであろう。

(3) レッドフィールドは文明において精神相は「自律性」を獲得したというが、筆者は文明において「自立性」は獲得したが、とくに近代文明や現代文明を考えたとき、「自律性」は弱いのではないかと考えている。

(4) 「ミッシェン系」と対極をなすのが仏教系や神道系の学校である。キリスト教には、漠然としてはいるが、「優れた宗教」あるいは「進んだ宗教」といったイメージがある一方、仏教や神道には、反対

に、「劣った宗教」あるいは「古い宗教」というイメージがあるようだ。文明中心主義批判のところで述べるように、どちらも単なるイメージであり根拠はない。しかし消し去りがたいイメージではある。こうしたイメージが世の中を動かしているのであって考えてみれば不気味である。

(5) 人間は身体だけの生物ではなく、精神、心、意識といったものももっている。人間、(内なる自然)、(心身) というように表現は違うが、実体は同じである。拡大(膨張)した人間の意識とその問題点については染谷二〇〇九を参照されたい。

(6) 文明そのものが複雑だったが、とりわけ現代文明はますます複雑になっていくことを見るにつけ、広領域にわたる文明研究は一人の研究では難しい。そこで何人もの専門家が共同して進める総合的な研究が必要となってくる。比較文明学会や麗澤大学比較文明文化研究センターのような研究機関にはそうした共同研究を進めることが期待されているように思う。

参考文献

チャイルド・V・G (ねずまさし訳) 『文明の起源 (下)』岩波書店、一九五一年。
 クラステル・P (渡辺公三訳) 『国家に抗する社会』白馬書房、一九八七年。

Encycloedia Americana, Grolier Inc, 1992.

加藤博文「シベリア石器時代―極寒の住居と衣服」NHKスペシャル「日本人」プロジェクト編『日本人はるかな旅』日本放送出版協

- 会、二〇〇一年。
- 河村善也「マンモスの時代」NHKスペシャル「日本人」プロジェクト編『日本人はるかな旅』日本放送出版協会、二〇〇一年。
- 木村英明「酷寒のシベリアー人類の移住と拡散」、NHKスペシャル「日本人」プロジェクト編『日本人はるかな旅』日本放送出版協会、二〇〇一年。
- 木村英明『北の黒曜石の道』新泉社、二〇〇五年。
- クライン&エドガー（鈴木淑美訳）『五万年前に人類に何が起きたか？—意識のビッグバン』新書館、二〇〇四年。
- Kroeber, A. I., and Kluckhohn, C., *Culture: a critical review of concepts and definitions*, Alfred A. Knopf, Inc. and Random House Inc., 1963.
- ルグラン「社会システムと価値システム—対話の道の立役者としての遊牧文化」服部英二監修『文化の多様性と通底の価値—聖俗の拮抗をめぐる東西対話』麗澤大学出版会、二〇〇七年。
- ルーウィン（保志宏訳）『ここまでわかった人類の起源と進化』てらぺいあ、二〇〇二年。
- マリノフスキー（寺田和夫・増田義郎訳）『マリノフスキー レヴィイストロース』中央公論社、一九八〇年。
- ムルタトゥーリ（佐藤弘幸訳）『マックス・ハーフェラー』めこん、二〇〇三年。
- 染谷臣道「日本文明の光と陰」『比較文明』比較文明学会、第二三三号、二〇〇七年。
- 染谷臣道「人間、この拡大するもの」『比較文明研究』第一四号、麗澤大学比較文明文化研究センター、二〇〇九年。

- トインビー・A・J（長谷川松治訳）『歴史の研究Ⅰ（サマウェル縮刷版）トインビー著作集Ⅰ』社会思想社、一九八〇年（一九六七年初版）。
- ブラムディア・アナント・トゥール（押川典昭訳）『人間の大地（下）』めこん、一九八六年。
- レッドフィールド（染谷臣道・宮本勝訳）『未開世界の変貌』みすず書房、一九七八年。
- シャルボニエ・G（多田智満子訳）『レヴィイストロースとの対話』みすず書房、一九七〇年。
- The New Encyclopaedia Britannica*, Encyclopaedia Britannica Inc., 1993.
- Tylor, E. B., *Primitive Culture: Researches into the Development of Mythology, Philosophy, Religion, Art, and Custom*. London: John Murray, Albemarle Street. 1871. Routledge/Thoennes Press, 1994.